浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要『生涯学習研究と実践』第10号　平成19年１月
Bulletin of the Lifelong Learning Research Institute, Asai Gakuen University Vol. 10　January, 2007

# 大学と地域で創る生涯学習活動の研究
## －後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み（４）－

# A Study on Lifelong Learning Activities Jointly Organized by a University and a Community
## －A Case Study of Regional Collaboration through Workshops in the Shiribeshi District（４）－

菊地達夫　藤原　等　高岡朋子　酒井宏三他*
KIKUCHI, Tatsuo　FUJIWARA, Hitoshi　TAKAOKA, Tomoko　SAKAI, Khozou et al.

## 1　はじめに

本研究は、４部構成となっている。その第４部では、「観光資源としてのミュージアムロードの評価」について触れることにする。本論文は各論的な内容となっている。

## 2　本研究の経緯と目的・方法

### （１）本研究の経緯

本論文は、本学生涯学習システム学部付設生涯学習研究所における機関研究成果の一部として行った「観光資源としてのミュージアムロードの評価」に関するものである。機関研究は、平成17年「大学と地域で創る生涯学習活動の研究」と題して実施したものである。この研究では、調査地を後志支庁倶知安町とした。研究活動の中心は、倶知安町でのワークショップを通じた大学と地域で創る生涯学習活動が、どのような効果をもたらすか明らかにしようとするものである。ワークショップの内容は、生涯学習研究所員の研究分野と倶知安町のニーズに合うものを調整し決定した[1)]。各ワークショップの運営は、生涯学習研究所の運営委員と倶知安町社会教育課職員によって行った。準備段階において、多少の期間を要したが、ワークショップの開催に結びつけることができた。開催期間は、平成17年11月～12月のうち、土日祝日で行った。なお、ワークショップに関する研究成果は別稿に譲る。

ところで、本論文の内容は、上記研究活動の付帯調査として行ったものである。ワークショ

---

*本研究は表記の４名の他、次の者たちによる共同研究である。中村康子・本間美幸・佐藤至英・佐々木邦子・森一生・阿部典英・末岡一伯・岡元眞理子・野崎嘉男・林亨・村井俊博・北村優明・沓澤隆・中出佳操・千葉圭説・田口智子。所属は、すべて浅井学園大学生涯学習研究所所員である。

ップの活動は生涯学習の推進を目的としており、活動の場として美術館、博物館、公民館などで行った。ワークショップ活動の場の一つである小川原脩記念美術館は、他の自治体の美術館と連携するミュージアムロードの関係施設に含まれる。そこでミュージアムロードの活用は、生涯学習活動の発展につながるものと考えた。また、美術館などは、観光資源にもなる。そのため、研究視点として観光活用をより重視した。

### （2）研究目的と方法

美術館や文学館を含む博物館は、生涯学習施設としての位置づけにあり、各種の教育活動に貢献している。同時に、いくつかの博物館は、有力な観光資源にもなっている。とりわけ、地域縁の人物といった美術館や文学館は、その傾向が強い。しかしながら、そうした美術館や文学館の入り込み数は、必ずしも増加していない。大規模な美術館は、常設展示の他に、特別展を企画することでリピーターを確保している。一方、特定の展示品に頼る美術館は、財政的な理由によって特別展の企画自体難しい。その結果、リピーターの確保につながらない。

小規模な美術館では、関係施設と連携する試みをしている。その多くは、入り込み数の増加と観光資源化の拡大を期待したものである。点在する美術館と連携することで観光資源の魅力が広がるものと考えている。

本論文では、点在する美術館の連携活動を取り上げ、主として観光活用について検討を加える。その連携活動として、しりべしミュージアムロードの事例を取り上げる。また、比較対象として、群馬県渋川市の事例を加味する。群馬県渋川市の事例では、観光活用において一定の成果を挙げている。一方、しりべしミュージアムロードの場合、必ずしも入り込み数の増加につながっていない。比較では、どのような点に違いがあるのか、検討していきたい。

美術館の連携活動に関する研究は、社会教育学（生涯学習）をはじめ観光学、地理学などでみられる。いずれの分野でも、まちづくりといった視点で、美術館の活用を捉えているものが多い[2)]。ただ、他地域にまたがる美術館を結んだ連携活動としての研究視点は少ない。

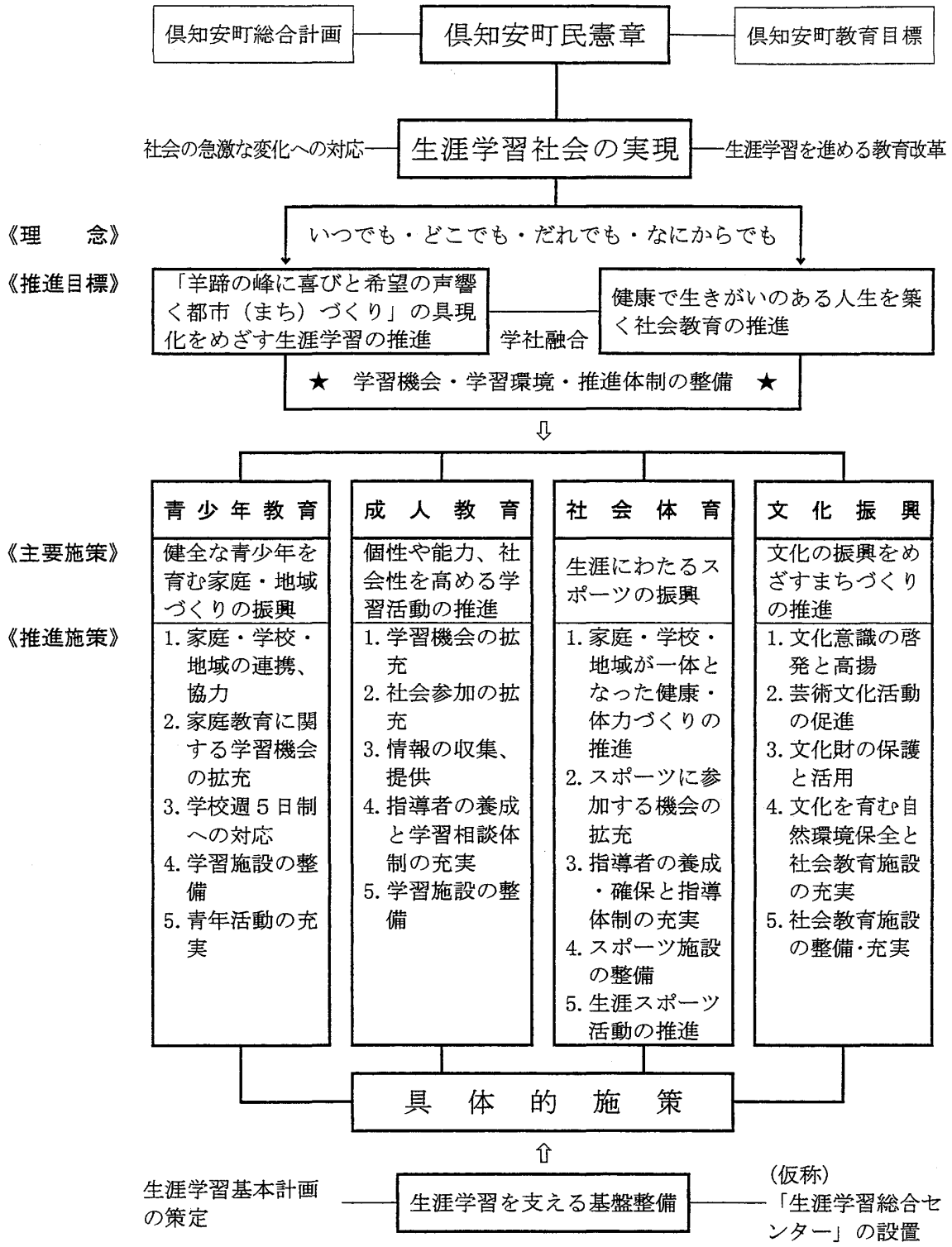
以下では、第２章で倶知安町の生涯学習活動について触れ、第３章でミュージアムロードの観光活用の実態と評価、第４章で比較対象の群馬県渋川市のそれを述べる。第５章において、比較考察しながら整理をする。なお、現地調査は、平成17年７月～平成18年３月の期間において数度行った。並行して、倶知安町内の宿泊施設の経営者には、ミュージアムロードに関してアンケート調査を行った。

## 3　ミュージアムロードの活用と生涯学習活動

### （1）　社会教育計画の中での位置づけ

本節では、ミュージアムロードの活用に関する生涯学習活動を、倶知安町社会教育計画の中でどのように位置付けているか、確認しておきたい。

倶知安町では、1998年から2007年までの社会教育中期行政計画を策定した。この基本計画は、各種委員や教員などから構成する社会教育委員会議の協議を経て、教育委員会に答申されたものである。基本計画は、青少年教育、成人教育、社会体育、文化振興といった4部門に区分される（第1図）。




第1図　倶知安町における生涯学習推進体系

資料）倶知安町社会教育中期行政計画

基本計画は、第４次倶知安町総合計画の一部を成している。総合計画では、交流と連携を柱としている。まちづくりの目標をみると、ランドマークとなる後方羊蹄山の風土の活用を強調している[3)]。

基本計画の目標は、生涯学習社会の実現である。計画策定の視点として、３つ示されている。１つは、あらゆる教育（学習）の機能の活性化、２つは、多様な学習活動の活性化、３つは、生涯学習の推進体制の整備充実である。ミュージアムロードの活用は、多様な学習活動の活性化のうち、文化活動の推進に最も適用されよう。さらに、文化活動の推進では、条件整備、伝統文化の保存、活用、継承、企業の文化活動への参加が細分されている。ミュージアムロードの活用を考えた場合、いずれにも関連する。条件整備は、既存美術館などの改修の他に、施設敷地内の効果的な空間の活用が考えられる。とりわけ、美術作品では、公園、道路を活用した野外展示を想定できる。伝統文化の保存、活用、継承では、地域資源の風景画を通じて気付かせることができる。例えば、木田金治郎美術館には、周辺地域に位置していたにしん番屋の風景画が展示されている。にしん番屋は、過去の日本海岸で賑わしたにしん漁の貴重な面影である。このように、風景画を通じて、伝統文化を知る機会を提供できる。企業の文化活動への参加では、各種催しものの財政的支援が考えられよう。

ミュージアムロードの活用に関する生涯学習活動は、基本計画の中においてあくまで間接的であり、具体的な位置づけにはやや乏しい。聞き取り調査では、こうした点についてミュージアムロードは他町を含むものであり、１自治体の基本計画の中で触れるには限界があると指摘している。

### （２）ミュージアムロード連携講座の内容

ミュージアムロードの連携講座は、関係施設間の数少ない連携の具体的な形である。連携講座は、４館のみで、ミュージアムロードすべての関係施設を含むものではない。その４館とは、小川原脩記念美術館（写真１）、西村計雄記念美術館、木田金次郎美術館、荒井記念美術館である。開催期間は、毎年夏期の約１ヶ月間となっている。連携講座のリーフレットには、各種イベント情報に加え、交通情報も掲載している。交通情報は、路線バス網、距離を記載し、公共交通機関や自家用車のいずれにも対応する。後で述べる観光情報を含め、いくつかある企画の中では、最もミュージアムロードの活用を浮き彫りとしている。

**第１表　しりべしミュージアムロード4館共同展「えかきの歳時記」の概要（2005年）**

| 美術館名 | 共同展のタイトル | 同時開催展 |
|---|---|---|
| 木田金治郎美術館（岩内町） | 春　よろこびの彩り | もうひとつの木田金治郎「絵の花畑」 |
| 荒井記念美術館（岩内町） | 夏　夏の日記帳 | ピカソ変貌の軌跡 |
| 西村計雄記念美術館（共和町） | 秋　この秋・なににする？ | 画業を巡る展覧会「自然への驚き」 |
| 小川原脩記念美術館（倶知安町） | 冬　白い季節の中で | 「自伝風の展覧会―画家のエスプリ」 |

資料）しりべしミュージアムロード4館共同展リーフレット。
注）開催期間は、7月13日～8月21日

第１表は、2005年のしりべしミュージアムロード４館共同展（えかきの歳時記）の概要であ

る。具体的には、４館を巡るように各館で季節に関する内容を題材としている。開催期間中、２つの特典を行っている（2005年度）。１つは、入館料の相互割引である。この対象施設には、上記の４施設の他に有島記念館も含まれる。割引は、５施設いずれかの入場券（半券）を他施設でみせると、団体割引料金になるというものである。小川原脩記念美術館の場合、一般料金が、100円割引となる。２つは、ビンゴ式のスタンプラリーによる景品抽選である。この対象施設は、上記５施設に加え、岩内町郷土館、かかし古里館、倶知安風土館（写真２）、市立小樽美術館の９施設である。応募機会は、対象施設すべてを見学した場合、共同展の４館を見学した場合、ビンゴが１列（３施設の見学）になった場合[4]の３種類である。各賞では、10名にオリジナル景品が当たる。

さらに、各施設または２館において、他の企画を同期間に行っている。小川原脩記念美術館では、西村計雄記念美術館と連携して８月の２日間、ワークショップを開催した。

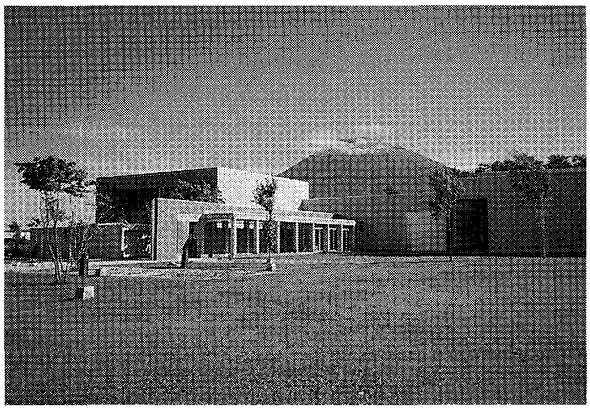


**写真１　小川原脩記念美術館の外観と羊蹄山（2006年撮影）**

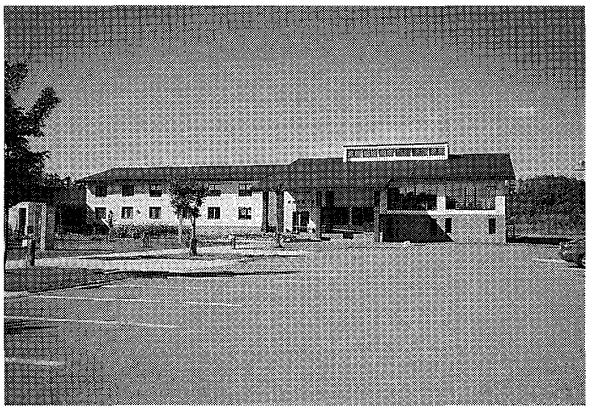


**写真２　風土館の外観（2006年撮影）**

## ４　ミュージアムロードの観光活用

### （１）倶知安町における主な観光資源

倶知安町における観光資源は、自然環境を活用した体験型のものを主とする。それは、スキー、スノーボードを主とする冬季スポーツ、ラフティング、パークゴルフ、トレッキングといったアウトドアスポーツに大別できる。冬季スポーツの場合、グラン・ヒラフ、ニセコワイス、旭が丘スキー場といった活動の場がある。とりわけ、グラン・ヒラフ（旧ニセコひらふ国際）は、北海道内の老舗に含まれ、有数の大規模なスキー場に変化を遂げた。索道施設はリフト19基、ゴンドラリフト１基を有し、34コースに及ぶ。滑走可能期間は、11月から５月までの６ヶ月間となる。近年、グラン・ヒラフにおいてオーストラリア資本の投下がすすみ、オーストラリア人の入り込み数が急増している。宿泊人数でみると、2003年2924人から2004年4201人の増加となり、その数は外国人観光客の８割近くに達する。

冬季スポーツに恵まれた環境は、早くから行政の後押しにつながった。1972年、倶知安町は、「スキーの町」を宣言[5]し、隣接のニセコ町と合わせ、国内外のスキーリゾート地形成のき

っかけとなった。また、スキー技術を普及したオーストリアの武官デオドール・フォン・レルヒ中佐を記念して、1986年にレルヒ記念公園も設置した。

次に、冬季以外のアウトドアスポーツについて述べる。活動の場は河川、高原、山岳を中心にある。河川では、ラフティング、カヤック、フィッシングがある。高原では、パークゴルフ、熱気球、乗馬などがあり、冬季にもスノーモービルを利用した雪原滑走ができる。山岳では、トレッキング、山菜採りなどを挙げられる。こうしたアウトドアスポーツを支援するため、比羅夫地区には、サン・スポーツランドくっちゃんを立地している。ここでは、多様な観光情報の提供と支援をしている。

見学型の観光は、景観を楽しむものが中心となる。後志支庁の一帯をニセコ、積丹、小樽海岸国定公園に指定されており、ミュージアムロードの沿線に湖沼が分布する。また、後方羊蹄山（通称は羊蹄山）は、別名えぞ富士とも呼ばれ、周辺地域のランドマークとして定着している（写真３）。他方、ミュージアムロードは、数少ない施設見学型の観光となる。その観光活用については、次節で述べる。

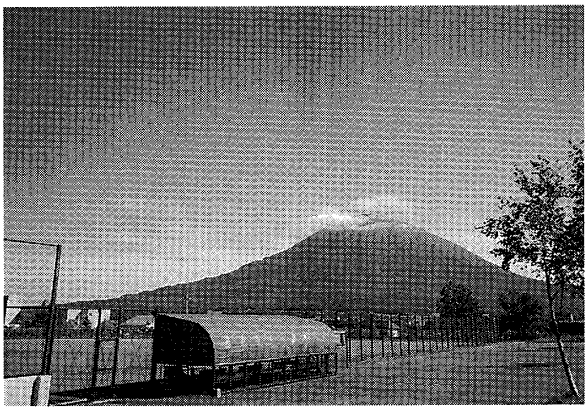
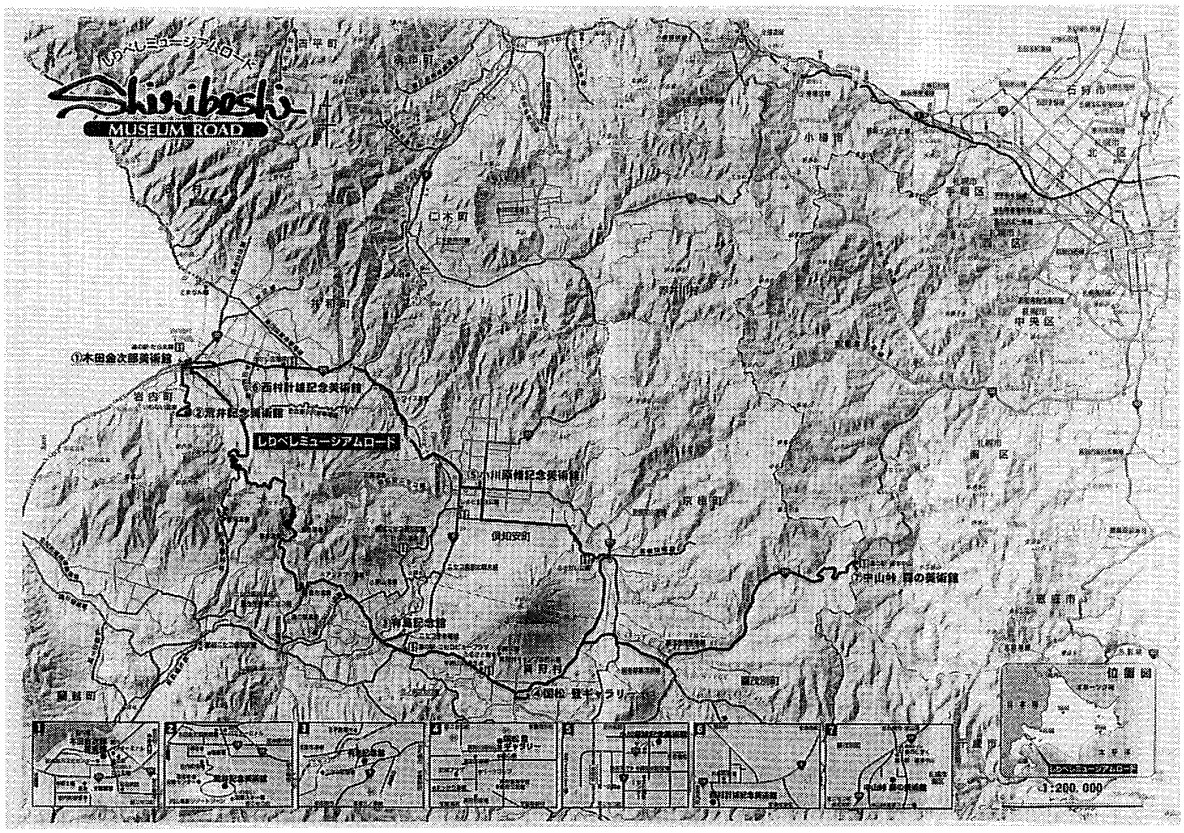


**写真３　羊蹄山（別名えぞ富士）の全貌（2006年撮影）**

### （２）ミュージアムロードの観光活用




**第２図　ミュージアムロードの概観図**
**資料）しりべしミュージアムロード推進協議会資料**

1）ミュージアムロード形成の過程

ミュージアムロードの形成は、大きく3段階に分かれる（第2図）。第1段階は、1995年、道道岩内洞爺線（66号線）沿線に位置する岩内町の木田金治郎美術館と荒井記念美術館、ニセコ町の有島記念館、真狩村の国松ギャラリーの4館で始まった。また、ミュージアムロードの愛称となった道道岩内洞爺線の通行は、冬季不通になるため、春から秋までに限られた。ミュージアムロードの構想のきっかけは、有島武郎と木田金治郎の親交にある。有島武郎の小説『生まれ出づる悩み』は、岩内町を舞台に木田金治郎をモデルにしたと言われる。

第2段階は、1999年、共和町の西村計雄記念美術館と小川原脩記念美術館が参加し、6館に増加した。これにより、ミュージアムロードは、線的な連携から面点なそれへ変化した。具体的には、道道岩内洞爺線に国道276号線（写真4）と5号線が加わり、ニセコ山系をほぼ囲む地理的空間になった。また、国道線は通年開通のため、四季を通じての観光資源となった。

第3段階は、2000年4月以降、喜茂別町の中山峠写真の森美術館が7番目の施設として参加した。そのため、面的な連携は、再び線的に延び、複合型の連携を形成した。具体的には、国道276号線から延びて国道230号線が加わった。

一方で、関係施設の閉鎖や一時休館が生じた。2002年、国松ギャラリーが閉鎖となり、続いて2004年、中山峠写真の森美術館も一時休館に追い込まれた。後者は、(株) 加森観光が運営することになり、再開（中山峠の森美術館に名称変更）している。ただ、(株) 加森観光は、多くのスキー場などを経営する大規模な観光業社であり、小規模運営する他施設とは性格が異なる。そのため、ミュージアムロードの関係施設としての連携は弱い。

また、木田金治郎美術館が、通年営業から冬季一時休館を検討し始めた。すでに冬季一時休館となっている荒井記念美術館に次ぐと、岩内町の関係施設はいずれも冬季休館になってしまう。そうすると、ミュージアムロードは、再び季節性を帯びた観光資源となる。元々、ミュージアムロードの構想は、入り込み数の増加を期待したものである。したがって、期間限定の開館は、観光活用が後退する可能性をもつ。

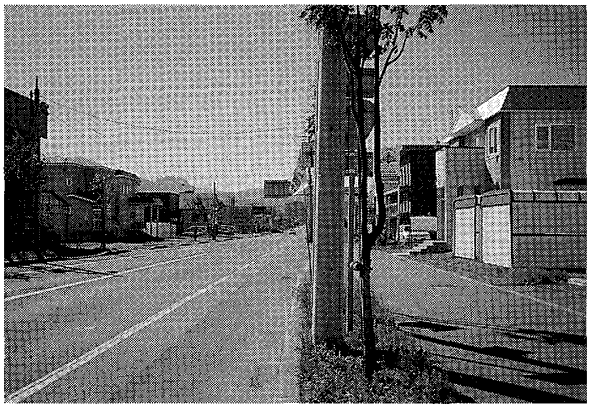


**写真4　ミュージアムロード（国道276号線倶知安町内）の様子（2006年撮影）**

2）観光活用の実態とその評価

ミュージアムロードの観光活用について、いくつかのリーフレットの比較と観光課の聞き取り調査を行った。リーフレットには、単体施設発行のもの、自治体発行のものがある。単体施設発行のリーフレットをみると、西村計雄記念美術館のみにミュージアムロードの紹介がある。その内容は、「しりべしミュージアムロード推進協議会」に加盟しているといった記載に留まる。他の関係施設の情報は掲載していない。自治体発行の場合、倶知安町、共和町のもので

はミュージアムロードの紹介がない。共和町のものでは、道道66号線をニセコパノラマラインと紹介し、ミュージアムロードの愛称を用いていない。

「しりべしミュージアムロード推進協議会」でも、リーフレットを作成している。その内容は、施設の位置、施設の概要、主要な画家の紹介を掲載している。他方、ミュージアムロードの経緯、関係施設を結ぶ交通手段の情報はない。また、閉鎖中の国松登ギャラリーの情報は修正されていない。よって、リーフレットの内容は、近隣に位置する美術館を紹介しているに過ぎず、地域的な連携構想が伝わらない。

次に、各自治体の観光課は、ミュージアムロードの観光活用を、どのように考えているか述べる。倶知安町では、ミュージアムロードについて観光活用をあまり考えていない。その理由として、広域町村にミュージアムロードの関係施設が分布するため、広報紙に積極的な掲載をしにくいと指摘する。ただ、自治体合併がすすむ中で、広域的な観光情報の必要性は感じている。

2006年３月、羊蹄山麓７町村でつくる「羊蹄山麓広域景観づくり推進協議会」は、美しい景観のくにづくり条例に基づく広域景観づくり指針を後志支庁長に提出した[6]。その指針には、観光地を含むが、ミュージアムロードについては触れられていない。

他の自治体では、ミュージアムロードの観光活用の考えが異なる。岩内町では、ミュージアムロードの観光活用に期待している。観光課では、ミュージアムロードについて積極的な情報提供をしている。その方法は、パンフレット、ポスター、HPなど多様にある。岩内町では、ミュージアムロードの観光情報を提供することで、観光客の誘引につながると判断した。また、共和町でも、ミュージアムロードの観光活用に期待している。ただ、リーフレットには、ミュージアムロードの情報を確認することはできなかった。

続いて、旅行社におけるミュージアムロードの観光活用について触れておきたい。(株) 朝日交通では、札幌駅を出発する１泊２日（宿泊は岩内町）の旅程で、小川原脩記念美術館、西村計雄記念美術館、木田金治郎美術館、荒井記念美術館、有島記念館を巡るものがある。各施設の移動には大型タクシーを利用し、十分な見学時間を確保している。

ミュージアムロードの観光活用は、リーフレットにおいて積極的な情報提供を確認することができなかった。各自治体におけるミュージアムロードの観光活用の考えは分かれた。さらに、一部の旅行社ではミュージアムロードを対象とした企画観光はあるが、十分な情報提供には至っていない。

ミュージアムロードの観光活用については、既存にある有力な観光資源の影響が大きいと考えられる。倶知安町の場合、スキーをはじめとするアウトドアスポーツが有力な観光資源になっている。他方、岩内町や共和町は、町内に有力な観光資源は少なく、ミュージアムロードの観光活用に期待した。それは、町内への観光入り込み数を増加させる目的がある。

### （３）宿泊施設経営者におけるミュージアムロードの評価

１）宿泊施設経営者の評価

本節では、倶知安町内に位置する宿泊施設経営者を対象に行ったアンケート調査の回答結果

を述べる。

まず、宿泊施設の経営者が、過去５年間、小川原脩記念美術館と風土館の見学回数について、尋ねた。小川原脩記念美術館の見学回数は、１回以上の見学が最も多い（31％）。ただ、リピーターとなる２回以上の見学回数は、少なかった。他方、６回以上、熱心に足を運んだ人もみられた。風土館の見学回数も、１回以上の見学が最も多い（33％）。小川原脩記念美術館と風土館は、同じ敷地内にあるので、一度に両方の見学をした可能性が高い。とりわけ、小川原脩記念美術館を見学した場合、風土館の入館料が無料となる。大半の宿泊施設と両施設は、自家用車で所要時間30分程度の距離にある。アンケート調査結果では、半数ちかく両施設の見学実績はなかった。ただ、宿泊施設の経営者には、町外出身者も多く、十分な地域情報を把握していない可能性はある。

併せて、ミュージアムロードの関係施設（町外）の見学実績（複数回答）についても尋ねた。その結果、有島記念館（ニセコ町）が最も多く（36％）、木田金治郎美術館（岩内町）、西村計雄記念美術館（共和町）が続き（各19％）、他２施設も若干名はあった。各施設の見学実績は、宿泊施設からの距離が離れるにしたがい、減少した。

次に、宿泊施設の経営者がミュージアムロードを理解しているか、尋ねた。その結果、ミュージアムロードについては、ほとんどが理解しているという回答を得た。ただ、理解度には、差異があるものと考えられる。

続いて、ミュージアムロードや各施設の情報を宿泊者に提供しているか、尋ねた。情報の提供は、概ね行っているものの、その機会はあくまで宿泊者が関心をもった場合に限られた。すなわち、宿泊施設の経営者が、積極的な情報提供を行っているわけではない。

リーフレットの設置状況は、小川原脩記念美術館が最も多く（45％）、有島記念館が続く（30％）。他の施設は、ほとんど置いていない。倶知安町観光課の聞き取り調査によると、各宿泊施設にリーフレット配布の斡旋はしていないと指摘している。そのため、リーフレットの設置有無は、各施設と宿泊施設の間で取り決めしていることになる。

最後に、観光資源としての有効性と情報提供の必要性について尋ねた。観光資源としての有効性は、やや否定的な結果になった。また、情報提供の必要性も、同様の結果になった。回答結果は、完全否定を示したわけではなく、中立な回答が多い。ただ、中立な回答の理由において、否定的な見解と認識できるものが目立った。

以上から、宿泊施設の経営者は、ミュージアムロードについて一定の認識をもつが、各施設の見学状況には差異があった。リーフレットの設置の状況も、差異がみられた。また、情報提供は、宿泊者の関心に応じて行われている。ミュージアムロードの観光資源としての有効性や情報提供の必要性は、あまり指示されなかった。

２）評価の要因

前節でみたように、ミュージアムロードの観光活用は、宿泊施設経営者にとって総じて低い評価になった。その理由は、大きく２つ考えられる。１つは、他に有力な観光資源を有するこ

とである。冬季では、スキー、スノーボード、他の季節では、トレッキングやラフティングをはじめとする多様なアウトドアスポーツがある。その証拠に、多くの宿泊施設は、スキー場周辺の山麓部に位置している。

２つは、美術館の魅力の乏しさにある。回答結果では、展示作品の画家があまり有名でない、美術館側の意欲が乏しい、地域住民の理解が乏しいなどが指摘された。また、宿泊者の反応を示すものとして、過去３年間、美術館に関する問い合わせは１件しかなかったという回答結果もあった。経営者だけではなく宿泊者も、美術館の魅力の乏しいことを認める内容である。また、ミュージアムロードに対する厳しい意見も出された。例えば、点在する美術館を脈略がなくつなぎ合わせたものに過ぎない、といった指摘があった。一方で、画家、歴史、地域をつなぐドラマのようなストリーを築けば、魅力が出るのではといった意見もあった。

結果として、ミュージアムロードの観光活用は、宿泊者の興味関心によるところが大きい。そのため、美術館を巡る観光は、情報提供も副次的なものと成りやすい。また、美術館を巡る観光の場合、宿泊を伴う可能性は低い。一方、スキー、スノーボードをはじめとするアウトドアスポーツは、宿泊する可能性は高い。したがって、宿泊施設の経営者は、アウトドアスポーツを目的とする宿泊者を誘引することであろう。加えて、アウトドアスポーツの場合、リピーターの期待も大きく、それは経営の安定化につながる。

## 5　他地域におけるミュージアムロードの活用事例

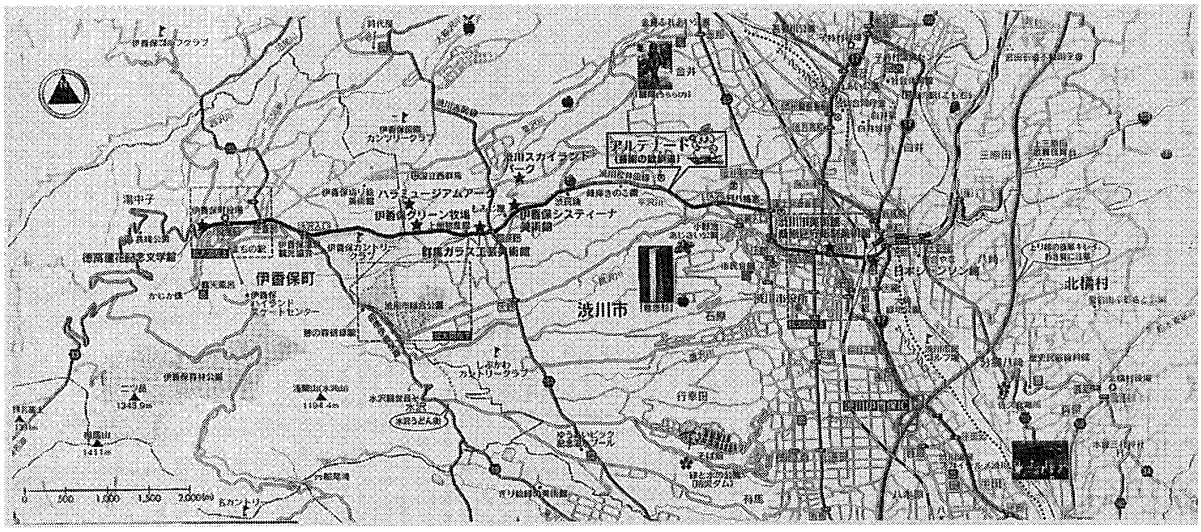
本章では、しりべしミュージアムロードの比較とするために他地域におけるミュージアムロードの観光活用について述べる。対象地域として、群馬県渋川市と伊香保町（現在は渋川市）のミュージアムロード構想を取り上げる。

### （1）ミュージアムロード形成の過程

ミュージアムロード構想のきっかけは、1995年以降、渋川市と伊香保町を結ぶ県道沿線に民間の美術館がいくつか立地したことに始まる。そこで、渋川市や観光協会では、日本シャンソン館（渋川市）から徳富記念文学館（伊香保町）までの９kmに点在する各施設を結び、観光誘致のイメージづくりを目指した。各施設とは、上記２施設の他に、渋川市美術館（桑原彫刻美術館）、伊香保システィーナ美術館、群馬ガラス工芸美術館、ハラミュージアムアーク、伊香保グリーン牧場、渋川スカイランドパークの８カ所である。伊香保グリーン牧場と渋川スカイランドパークは、美術館ではなく、県道沿線に位置するアミューズメント施設である（第３・４図）。

1999年、各施設の広報担当者が集まり、ミュージアムロード構想を具体化した。事業として、道路の愛称募集、共通リーフレットの発行、施設見学会の実施を決定した。道路の愛称募集は、約２ヶ月間全国に向けて公募し、504点の応募があった。選考の結果、2000年５月「ア

第３図　アルテナードのリーフレット表紙と紹介文
資料）渋川市観光協会リーフレット




第４図　群馬県渋川市ミュージアムロード（アルテナード）の概観図
資料）渋川市観光協会リーフレット

ルテナード」に決まった。「アルテナード」は、イタリア語で芸術の散歩道を意味する。また、渋川市と伊香保町が、イタリアに姉妹都市を有していたことも大きな後押しとなった。

これ以降、アルテナードの観光活用は、本格化する。2001年には、アルテナードのマスコットキャラクターも公募した。とりわけ、PR効果の拡大を期待して、イラスト、ネーミングに分けて実施した。イラストには333点、ネーミングには1181点の応募が集まった。イラストは、アルテナードのイニシャル「A」をモチーフに、渋川市と伊香保町を２つの葉で表し、豊かな自然環境と共生する観光地のイメージを表現した。ネーミングは、「アルティ」に決まった。マスコットキャラクターの誕生は、記念イベントの開催に結びついた。また、渋川市は、県の都市観光モデルに選定され、アルテナードをテーマにしたシンポジウムも開催されている。

共通リーフレットは、アルテナードの意味の紹介、各施設の情報、位置地図を掲載した。2005年には、内容を改正し、周辺観光資源も紹介するようになった。具体的には、果樹園、桜の名所、温泉、農作物直売店の位置を加えた。その結果、アルテナードを軸として、より一層の面的な観光地のイメージを広めた。

施設見学会は、アルテナードの各施設を巡る３コースを設定したものである。参加対象者は、渋川市内在住・在勤の人であった。各コース20名を定員として、各施設において学芸員などが説明した。参加費は、観光協会が一部助成し、1600円という低価格に押さえた。この見学会は、地域住民の観光資源の理解を高めるために行ったものであり、単なる観光旅行とは異なる。

2002年、観光客の要望を受けて、各施設の共通チケットの販売も開始した。この共通チケットは、購入日から１年間有効で、通常料金（5050円）の約半額（2500円）といった大幅な割引となっている。

渋川市観光協会によれば、アルテナードの特色を３つ挙げる。１つは、新規に施設整備したのではなく、既存の施設を連携させ、１つの観光地のイメージとしたこと。２つは、行政と地域住民さらに観光客が一体となって活動していること。３つは、２つの異なる自治体（現在は合併により１自治体）で行ったことである。

以上から、ミュージアムロード形成は、美術館と周辺の観光資源を組み合わせ、１つの観光地のイメージにつながった。広報活動では、各種ネーミングの呼称を公募するという手段で、一方的な方法を避け、参加意識を与えた点を注目できる。こうした試みは、観光客の興味関心を刺激し、入り込み数の増加につながったと考えられる。また、共通チケットの販売も、各施設の入り込み数の増加に一定の役割を果たした。さらに、地域住民の理解、観光客の意見収集、各施設の関係者の情報共有を継続的に実施してきた点も観光資源の魅力を高めた。このような事業の積み重ねは、県レベルの財政支援を得ることにもつながった。

**（２）観光活用の実態**

すでに述べたように、ミュージアムロードの形成は、各種の事業において１つの観光地のイ

メージを鮮明にした。共通のリーフレットや共通チケットの販売は、その形を示すものである。ここでは、その他の事業を加え、アルテナードの観光活用の効果と課題について考察したい。

その他の事業は、スタンプラリー、バスツアー、絵はがき作成、アルティグッズの販売である。スタンプラリーは、アルテナードの命名を記念した事業であり、2000年から毎年実施している。その内容は、各施設のスタンプを３つ以上集めるとオリジナル景品を贈与するものである。また、旅行券などの当選機会もある。さらに、毎月、「イチ押し」の施設を決め、そこを見学すると一度に２つのスタンプがもらえるといった特典もある。その結果、施設の見学を促し、スタンプラリーの参加も増加した。バスツアーは、2000年より、各施設を巡る内容で実施している。2005年の場合、「アルテナードと季節の花巡り」と題したツアーを年４回行い、これまでの最大応募人数を大幅に上回った。絵はがき作成は、アルテナードのPR活動を目的に始めたものである。これまで、2003年、2004年の２回にわたり、絵はがきを募集した。入選作品10点を選び、それらを活かしアルテナード絵はがきを作成した。アルティグッズの販売は、マスコットキャラクターの「アルティ」を入れたバスタオル、マグカップ、ぬいぐるみを各施設で扱っている。

こうした事業は、アルテナードの各施設を巡るきっかけとなって観光客の興味関心を強めた。また、地域住民も、観光資源に興味をもつようになり、観光ボランティア（渋川旅先案内人）の担い手として協力している。

一方で、課題が浮き彫りになってきた。１つは、事業のマンネリ化である。アルテナードの観光活用がある程度軌道に乗ることで、新たな事業の意見が乏しくなった。現在のところ、新たな事業の計画は立っていない。２つは、自治体再編の影響である。2006年２月20日、渋川市と伊香保町、他４村が合併し新渋川市（６市町村合併）となった。元々、アルテナードの観光活用は、渋川市と伊香保町の取り組みであり、新たに合併した４村は含まれていない。周辺地域（４村）の観光資源を含めアルテナードの地理的範囲を拡大するとあまりにも広範囲になってしまう。

## 6　おわりに

本論文では、点在する美術館や文学館の連携活動を取り上げ、観光活用の視点をもとに実態と評価について検討を加えた。そこで得られた知見を整理しておきたい。

第２章では、ミュージアムロードの活用について、社会教育計画の中での位置づけを確認した。その結果、倶知安町社会教育計画には、具体的な文言での活用は触れられていなかった。他方、その中身において、ミュージアムロードの活用を期待させる内容は確認できた。

第３章では、倶知安町の観光資源を概観し、ミュージアムロードの観光活用の実態、宿泊施設経営者の評価を明らかにした。倶知安町の観光資源は、スキーをはじめとする体験型の観光を主としており、アウトドアスポーツは多種に富む。リーフレットの情報内容では、ミュージ

アムロードの観光活用の扱いは少なかった。また、しりべしミュージアムロード推進協議会のものでも、情報内容は不十分であった。

次に、各自治体におけるミュージアムロードの観光活用の評価は分かれた。岩内町や共和町では、観光活用を評価した。一方、倶知安町では低い評価であった。宿泊施設の経営者は、ミュージアムロードの一定の認識はあるものの、宿泊者の情報提供について消極的であった。その理由は、地域に根ざす有力な観光資源の影響によると考えられる。

第４章では、群馬県におけるミュージアムロードの観光活用について述べた。ミュージアムロードの観光活用は、一方的な情報提供ではなく、参加意識を与えることで観光客の誘引を図った。また、ミュージアムロードの関係施設は、美術館や文学館に留まらず、周辺地域の他施設も含んだ。各種の事業は、１つの観光地としての魅力づくりにこだわった。

一方、しりべしミュージアムロードは、初期段階から十分な連携を検討しないまま推移してきたところがある。その結果、周辺地域に位置する美術館の情報を脈略なく提供することにつながった。また、１つの観光地としての魅力も欠いた。このことが、群馬県におけるミュージアムロードの観光活用との大きな相違点である。さらに、有力な観光資源が地域に根付いていたことも、ミュージアムロードの興味関心を希薄にした。以上から、しりべしミュージアムロードの観光活用は、十分に機能しなかったと考えられる。

そこで、一つの提案を述べておく。それは、木田金治郎、有島武郎、小川原脩、西村計雄といった人物の軌跡を組み合わせたミュージアムロードの観光活用である。具体的には、生家（アトリエ）、学校、文学碑、その他縁の場所をむすぶ観光コースの設定をする。とりわけ、有島武郎と木田金治郎の親交は、観光客の興味関心を駆り立てよう。こうした観光活用は、目新しいものではないが、広域的な連携をするような試みはそれほど多くはない。人物史を辿ることは、動態的な観光資源となり、生涯学習活動としても有益であろう。

今後、関係自治体や機関の新たな取り組みによって、ミュージアムロードの観光活用や生涯学習活動が、向上することを期待したい。

生涯学習研究所研究論文集と生涯学習研究所研究紀要第10号に掲載されたものは同じ内容である。

## 付　記

本論文を作成する上で、倶知安町社会教育課および観光課職員をはじめ、関係美術館職員には資料収集や聞き取り調査で大変お世話になった。また、アンケート調査では、倶知安町内の宿泊施設経営者の方々にご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

本論文の内容は、平成17年度浅井学園大学特別研究（共同研究）費を使用した。

生涯学習研究所研究論文集と生涯学習研究所研究紀要10号の掲載されたものは同じ内容である。

## 注

1）ワークショップの内容は以下のとおりである。ファミリーコーラスin倶知安、親子で造るオヨメサンとなかまたち、バトミントン・レディス競技講習会、吹奏楽を楽しもう、身近な材料で凧づくり、美しい景色と空気に輝く歌声を求めて、マネージメントゲームで経営の体験学習を、朗読劇ができるまで、これからの幼保の一元化、フリーター・ニートの現状を知ろう。

2）まちづくりとしての美術館などの活用に関する研究成果として、社会教育学（生涯学習）では瀬沼（1998)、観光学では井口（2005)、地理学では石原（2000）などがある。

3）まちづくりの目標として、4つ示されている。羊蹄の頂きに風を起こす人のいる都市(まち)をつくる、羊蹄の峰に喜びと希望の声響く都市(まち)をつくる、羊蹄の光に映える清新な彩りの都市(まち)をつくる、羊蹄の麓で創造する産業のある都市(まち)をつくる。

4）ビンゴ式スタンプラリーでは、以下のようなスタンプ欄の配置がされており、縦横斜めに揃うと景品抽選の対象となる。上段左から右にかけて、木田金治郎美術館、岩内町郷土館、西村計雄記念美術館、中段左から右にかけて、荒井記念美術館、市立小樽美術館、かかし古里館、下段左から右にかけて、有島記念館、倶知安風土館、小川原脩記念美術館。

5）スキーの町宣言は、昭和47年12月20日に行った。宣言文は以下のとおり。私たち倶知安町民は、雄大なる羊蹄、ニセコ連邦に抱かれて、きびしい風雪にひるむことなく、幾代に亘ってこの地を開拓し、豊かな郷土を培ってきた。これは、酪農、多雪の風土のもとにつちかわれた剛健な心身と、たくしましい意欲のたまものである。今や雪は、町民の心身を育てると共に、郷土をスキーのメッカとして大きく躍進させる天与の宝となりつつある。私たちは、明るくたくましい雪国の生活を目指して、スキーのすべてを町民のもとし、スキーを通じて、たくましい心身を育て、ゆたかな町づくりに資することを乞い願い、スキーを町技と定め、ここに「スキーの町」を宣言する。

6）北海道新聞朝刊2006年3月3日掲載記事。

## 文　献

井口貢編（2002):『観光文化の振興と地域社会』ミネルヴァ書房。

井口貢（2005):『まちづくり・観光と地域文化の創造』学文社。

池上惇他（2001):『文化政策入門』丸善ライブラリー。

石原照敏他（2000):『新しい観光と地域社会』古今書院。

北川宗忠編（2004):『観光文化論』ミネルヴァ書房。

倶知安町教育委員会（1997):『倶知安町社会教育中期行政計画』倶知安町。

瀬沼克彰（1998):『生涯学習と地域活性化』大明堂。

ニセコ山系観光連絡協議会（2004):『ニセコエキスプレス19』北海道アート社。

宮口侗廸（2000):『地域づくり』古今書院。